

『渡り鳥の環境文化学』

LIBRARY ICHIKO 161 WINTER 2024 1月31日 発売予定

スウェーデンの大神学であり地理学者でもあったオラウス・マグヌスは、「北方のツバメは秋に葦をねぐらにして、泥の中に沈み、冬は水中で冬眠する」と発表した。この「水中越冬説」が、研究の進展する19世紀まで信じられていたように、渡り鳥の生態は、いまだ神秘と浪漫に満ち溢れている。

「渡り鳥」と一口に言っても、多種多様である。日本の立場からすると、越冬のために北から飛んでくる「冬鳥」、繁殖のために南から飛んでくる「夏鳥」、日本を経由して繁殖地や越冬地に向かう「旅鳥」が存在する。当然ながら、日本にとつて冬の鳥であっても、異国では夏の鳥であったりする。渡りの距離や高度も千差万別である。

渡りの季節。鳥たちの飛来地は、生命の躍動感で溢れている。冬の出水平野（鹿児島県）には、毎年1万羽を超えるナベヅルが飛来する。ナベヅルは、シベリアやアムール川流域で繁殖するが、当地が雪と氷で閉ざされる前に、朝鮮半島を経由して、順次やってくる。その数は12月にピークを迎え、田園地帯はナベヅルの鳴き声で満たされる。その哀愁を帯びた声は、「残したい日本の音風景」百選にも選ばれた冬の風物詩となっている。

水温む頃。春の東よか干潟（佐賀県）には、遙か南のオーストラリアから、シギ・チドリ類が大挙して、飛来する。南半球からノーストップで数千キロも飛んでくる鳥たちが目指すのは、餌の豊富な夏のシベリアやアラスカ等の極北地帯である。その中継地として、重要なのが干潟である。シギやチドリの仲間は、カモ類と異なり、水に浮くことができないため、食餌環境を干潟に依存している。数千羽から数万羽にのぼるシギ・チドリが干潟を見計らい、群れを為してランディングする姿と、その豪快な羽音は圧巻の一言である。

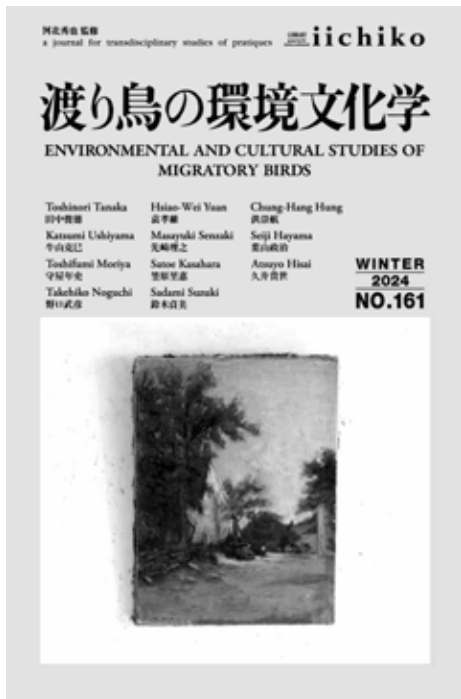
ミーニシ（新北風）が吹く頃。秋の宮古島（沖縄県）では、繁殖を終えたサシバが本州や九州からやってくる。夏の終わりを告げる風に乗って、サシバが空高く舞う。「ピックイー」という高い鳴き声は、寂しい風と相まって、祭りのおとのような切なさや穏やかさを帯びている。この頃、北海道や本州の高地では初雪が降り始める。こうして渡りの季節が巡り、再び冬がやってくる。

鳥たちの鳴き声や羽音に満たされた季節は、自然環境が健全であることの証でもある。そして、渡り鳥は平和の象徴でもある。ナベヅルがそうであるように、シベリアやアムール川流域（ロシアや中国）で繁殖して、朝鮮半島（北朝鮮や韓国）を経て日本にやってくる渡り鳥は数多い。「近くて遠い国」とも形容される東アジア諸国だが、渡り鳥に国境は存在しない。政治の如何を問わず、関係する国々の協力が問われる生き物の代表が、渡り鳥である。この冬も変わらぬ渡りの風景を見ることができたと感じるとき、地球の平和と安全を願わずにはいられない。

（田中俊徳）巻頭言 渡りの季節、平和の季節「より抜粋」

▼袁孝維 洪崇航「戦争の遺産：馬祖列島のアジサシ類保護区とヒガシシナアジサシ」▼牛山克巳「渡り鳥、湿地、人」価値の変遷とつなかりの再生」▼先崎理之「渡り鳥たちの夜間飛行」▼葉山政治「渡り鳥を守る」▼守屋年史「水辺の渡り鳥と湿地の保全」▼笠原里恵「コチドリを追って台湾へ」▼久井貴世「歴史資料が語る江戸時代のツルの旅」▼田中俊徳「渡り鳥の保護をめぐる国際法制と平和構築」▼野口武彦「山吹夢譚」▼鈴木貞美「日本のナラトロジーへ」▼カラー特集「Mandarin 文明と民族の交錯」

「LIBRARY ICHIKO」は季刊誌です。次号は二〇二四年四月末発行予定です。



A5 変形 128頁 1650円 (本体+税10%)

【監修・アートディレクター】
河北秀也 (かわきた ひでや)
1947年生まれ。日本バリエールアートセンター主宰。著書に『デザイン原論』など。本誌プロデューサー、アート・ディレクター。

【編集・ディレクター】
山本哲士 (やまもと てつじ)
1948年生まれ。
政治社会学、ホスピタリティ環境学。
主な著書に、『ミシェル・フーコーの思考体系』、『ホスピタリティ講義』、『国つ神論』、『くもの』の日本心性』、『高倉健・藤純子の任侠映画と日本情念』、『フーコー国家論』ほか多数。

ご注文は「RICK」
↓
Fax. 03-3294-2177

文化科学高等研究院出版局

tel.03-3580-7784 fax.03-5730-6084

渡り鳥の環境文化学

LIBRARY ICHIKO 161 WINTER 2024 1950円 (税込)

ISBN 978-4-910131-40-5 C1010 ¥1500円

書店名

部数